

to the molecular machinery after stimulation in cerebellar parallel fibre-Purkinje cell synapses. *Neuroscience* 2017. Washington, D.C., Nov.

- 8) Suzuki E, Momiyama T. (Poster) M1 receptor-mediated presynaptic inhibition of GABAergic transmission from striatal medium spiny neurons onto cholinergic interneurons. 第95回日本生理学会大会. 高松, 3月. [J Physiol Sci 2018; 68(Suppl.1): S106]
- 9) Shimuta M, Ishikawa T. (Poster) Temporal patterns of multi-pathway signals in the cerebellar cortex. 第95回日本生理学会大会. 高松, 3月. [J Physiol Sci 2018; 68(Suppl.1): S162]
- 10) 中村行宏, 堀 哲也 (同志社大). (ポスター) 中枢神経シナプス前末端における即時放出可能小胞の包括的分布の推定. 第95回日本生理学会大会. 高松, 3月. [J Physiol Sci 2018; 68(Suppl.1): S132]

## 病 理 学 講 座

教 授: 池上 雅博	人体病理学: 消化管の病理
教 授: 鈴木 正章 (病院病理部に出自中)	人体病理学: 泌尿生殖器, 乳腺の病理
教 授: 清川 貴子 (病院病理部に出自中)	人体病理学: 産婦人科の病理
教 授: 鷹橋 浩幸 (病院病理部に出自中)	人体病理学: 泌尿生殖器の病理, 分子病理学, 診断病理
准教授: 千葉 諭	人体病理学: 肝, 骨髄, 循環, 脾, 胎生形態学の病理
准教授: 野村 浩一 (病院病理部に出自中)	人体病理学: 産婦人科の病理
准教授: 濱谷 茂治	人体病理学: 消化管の病理
講 師: 遠藤 泰彦 (富士市立中央病院に出自中)	人体病理学
講 師: 原田 徹 (病院病理部に出自中)	人体病理学: 呼吸器疾患, 肝疾患の病理
講 師: 小峯 多雅 (厚木市立病院に出自中)	人体病理学: 肝臓, 腎臓の三次元的構造解析

## 教育・研究概要

### I. 消化管に関する研究

1. 小腸クローン病の手術検体を全割し, 類上皮肉芽腫と潰瘍の存在部位をマッピングし, 肉芽腫の壁内での分布および肉芽腫と潰瘍の位置関係を検索した。総計で 385 個の肉芽腫が認められ, 粘膜内に 1.3%, 粘膜下層に 19.8% の割合で分布していた。97.1% の肉芽腫は, 水平方向で潰瘍から 10mm の範囲内に存在していた。クローン病を正診するためには, 潰瘍から 10mm の範囲内で, 粘膜下層を含めた生検組織の採取が望まれる。

2. 2016 年度より潰瘍性大腸炎の内視鏡所見と組織所見の対比について検討を行なっている。対象患者は 191 例で, 採取された生検検体は 537 検体であった。炎症の程度は内視鏡所見と組織学的所見で相関する傾向にあったが, 組織学的所見の方がより高度であった。さらに, 内視鏡的にびらん・潰瘍を伴う高度な炎症性粘膜では, 組織学的に basal plasmacytosis を 58.5% に認め頻度が高かった。Basal plasmacytosis は活動性炎症を示唆する所見として重要と思われた。

3. 大腸神経内分泌腫瘍における組織学的特徴について研究した。特に 2010 年 WHO 消化器腫瘍分類における Grade 分類と脈管侵襲および予後との

関係について検索した。外科的切除および内視鏡的切除を施行された大腸カルチノイド腫瘍を用い、HE染色に加え、elastica van Gieson (EVG) 染色および免疫染色(CD31, D2-40, MIB-1抗体)を行った。各病変をGrade分類に従って分類し、腫瘍径、深達度、粘膜下層浸潤距離、核分裂数、Ki67指数、脈管侵襲について検索した。脈管侵襲を初めとするこれらの危険因子と予後との関係性について検討する。当院での内視鏡例139例および手術例21例、合計160例の症例を対象として、現在解析中である。

4. 大腸粘膜下層浸潤癌(SM癌)のリンパ節転移予測因子の検索のため、2009年から2015年までの大腸sm癌124症例のHE標本を検討した。SM以深の重複癌を除く102症例を抽出し、代表切片に対しては特殊染色、免疫組織化学的染色を行なった。陥凹の有無、粘膜内増殖態度(NPG, PG)、浸潤実測値(1,000 $\mu$ m未満, 1,000 $\mu$ m以上)、浸潤部組織型、簇出の有無(+/-)、脈管侵襲:リンパ管侵襲(+/-)、静脈侵襲(+/-)、脈管侵襲の原発巣内での位置と個数、低分化型腺癌や粘液癌の混在の有無、簇出、脈管内での癌腫の形態(孤細胞性/胞巣形成性)等の項目を設定し、データを抽出し、今後多変量解析を行う予定である。

## II. 腎臓に関する研究

### 1. 厚労省IgA腎症分科会前向き多施設共同研究

IgA腎症の組織学的重症度分類のA/C亜型分類に関して、847症例を解析した結果、A/C亜分類は、扁桃摘出ステロイド治療の対象となる症例を選別するのに有用であった。

### 2. 走査型電子顕微鏡を用いた糸球体腎炎の3次元構築

国立生理学研究所に導入されたserial block-face scanning electron microscopy (SBF-SEM)を利用し、IgA腎症を解析した。糸球体基底膜の破壊の様式により、メサングウム細胞が上皮側に侵入するタイプと上皮細胞が内皮側に侵入するタイプに大別された。その結果、足細胞とメサングウム細胞の相互作用はparacrineを介してではなく、細胞の直接接触による機序であることがわかった。

## III. 泌尿生殖器に関する研究

1. 前立腺癌生検検体でグリソンスコア3+4=7の症例において、生検におけるグリソンプターン4の割合やその他の生検パラメーターが、前立腺全摘術検体における予後予測因子としての有用性であるか否かについて比較検討した。生検におけるグ

リソンプターン4の割合が5%以上の症例では、全摘検体における悪性所見、生化学的再発のリスクがグリソンスコア3+3=6の症例と比較して上昇していた。

2. 上部尿路上皮癌148症例についてHER2過剰発現の有無および免疫組織化学的亜型分類を検索し、臨床病理学的因子との関係を検討した。その結果、14%の症例にHER2タンパク過剰発現あるいは遺伝子増幅が認められた。さらに、全ての症例は免疫組織化学的にbasal subtypeとluminal subtypeに分類され、HER2タンパク過剰発現あるいは遺伝子増幅を伴う腫瘍はbasal subtypeの4%、luminal subtypeの22%を占めていた。

## IV. 女性生殖器に関する研究

1. 昨年度に引き続き、2014年に改訂されたWHOの子宮頸部腺癌組織分類の妥当性と問題点を明らかにする目的で企画された国際共同研究に参加した。その組織像のreview、免疫組織化学、予後調査の結果、分類の問題点と診断時の免疫組織に関するアルゴリズムを完成させた。

2. 当院における子宮内膜癌肉腫の診断精度と予後について産婦人科と共同研究を行い、若年者にも発生すること。その場合組織学的に高異型度成分と低異型度成分が混在することが明らかになりつつある。

3. 卵巢漿液粘液性境界悪性腫瘍(SMBT)を背景に発生する悪性腫瘍について検討した。当院で診断された卵巢癌のうち、背景にSMBTを伴う16腫瘍について、悪性腫瘍の組織型、浸潤パターン、進行期、合併病変の有無などを病理学的に検討した。結果、SMBTを背景に発生する悪性腫瘍の大部分は類内膜癌で、漿液粘液性癌は稀であった。侵入性浸潤が既報告よりも高頻度にみられた。進行期はFIGOステージIが大部分であった。

## V. 分子病理学に関する研究

### 1. 肺がんの発生・進展に関連する染色体不安定性の解析

原発性肺癌の各組織型を対象とし、いくつかの候補染色体領域にあるマイクロサテライトマーカーを用い、3pを中心として、網羅的に染色体不安定性解析を行う。その結果から各組織型の肺癌の発生・進展に最も関連する染色体領域を突き止め、候補染色体領域に存在する新たな責任遺伝子を見出すことを最終目的とする。まず、日本人肺癌患者におけるマイクロサテライト解析に応用するヘテロ接合型の

DNA 多型マーカーを選び出すために、16 症例の日本人肺癌患者の正常肺組織を用い解析した。3 番染色体短腕の全領域 (3p12-26.3) に存在する 321 個の既知の遺伝子に関連するマイクロサテライトマーカーを解析対象とし、PCR-LOH 法にて網羅的解析を行った。その結果、321 個の DNA 多型マーカーのうち、PCR 産物として検出できるマーカーは、312 個 (97%) であった。そして、312 個の DNA 多型マーカーのうち、ヘテロ接合型であるのは僅か 47 個 (15%) であった。欧米人に比べ、日本人において informative microsatellite marker が少ない現象は、4p, 6q, 8p, 9q, 10q および 13q など他の染色体領域においても観察されることから、これは日本人、もしくはアジア人のゲノムの特徴であると推測される。このゲノムの特徴を利用し、日本人肺癌患者の癌組織を解析することにより、より効率的に候補染色体領域にある責任遺伝子の局在を明らかにできると考える。

## VI. その他

1. 肝小葉の半径の加齢性変化を中心に、解剖例を用いて、肝臓の組織計測を行った。肝小葉の半径 (y) は年齢 (x) とともに増加し、40 歳以上では  $y = 0.0032x + 0.3167$  で  $R^2$  は約 0.65 と比較的高い相関が得られた。

2. 右下肢の劇症型 A 群溶連菌感染の解剖例を経験した。感染部では細菌は多数存在したが炎症はほとんどなかった。文献上では、劇症型 A 群溶連菌感染では局所の炎症を認めないかごく弱いことが判明した。本症例では M タンパクの検索などは行わなかったが、文献的にはヒアルロン酸莢膜の存在、M タンパク、C5a ペプチダーゼ、核酸分解酵素などが炎症抑制的に働くことが記載されている。

## 「点検・評価」

例年通り、病理学講座では主として卒前・卒後教育業務、病院病理部では主に病理診断業務が行われた。講座教員は、3 年生、4 年生の講義と病理学実習、3 年生の研究室配属、6 年生の選択実習を担当し、きめ細かな教育・指導を行った。病院病理部出向教員は、16,936 件の病理組織診断、14,991 件の細胞診断、27 例の病理解剖診断をはじめとする病理診断を主軸とする業務に携わった。今年度も教育業務と診断業務をお互いに協同し遂行した。CPC、臨床各科との症例検討会に関しては従来のものに加え、新たに乳腺外科との検討会を開始し、個々の症例に関する臨床医とのディスカッションを通して、医療

に貢献するとともに、初期研修医をはじめとする卒後教育にも病理医としての役割を果たした。病理学講座での研究室配属学生の受け入れと共に、今年度より本院及び柏病院の病院病理部では臨床クラクシップの医学生の受け入れも開始し、卒前教育にも積極的に参画した。

本年度は、3 名の新入局者があった。若手医師は順調に育成されており、徐々に分院病院病理部の定員も充足され診断分野では充実化が図られている。分院病院病理部のスタッフ人員の充足とともに、ほぼ 20 年ぶりに海外への留学者派遣を果たすことが出来た。若手病理医が本学を離れ、研究生活に没頭できることは将来的にみて大きな財産を生み出すと予測され、今後に期待したいところである。

臓器別の各研究分野での実績も着々と成果を見せつつある。消化管、肝、腎、泌尿生殖器、婦人科、中枢神経系の各臓器別専門領域が大きな 6 つの柱となっており、各領域において 1～数名よりなる研究チームが精力的な活動を行った。各々の領域において海外を含む学会発表。論文発表における成果を上げてきている。また当該臨床科とのコラボレーションによる研究も同時並行で行われており、臨床研究の支援および病理学的研究における臨床からの支援が相互に行われ始めてきたことは今後の研究展開においても重要なことと考えている。次年度は既存の専門分野に加え、未だ専門性の充実化が図られていない領域についても、順次着手していくことが望まれる。

出産・育児のため休職を選択する女性医師の一部が、時短勤務制度を活用して業務に復帰した。復帰した女性医師はまず病理学講座で教育・研究に従事している。復帰直後は相対的に時間的猶予の大きい病理学講座での業務をこなしつつ、徐々に時間的制約の厳しい病院病理部での診断業務にも復帰するという方法は、今後復帰していく女性医師のプロトタイプになるものと予測される。ICT の充実化に伴い、産休、育休期間においても自宅で自己学習をすることは可能な時代になってきている。今後は産休・育休中医師の自己学習プログラムの作成も視野に入れていくべきと思われる。

ここまで記したように、業務のうち診断、教育は即時的なものであり、この 2 つに多くの時間を割かざるを得ない。また昨今の「働き方改革」により、医師にも勤務時間の遵守が求められてきている。限られた時間の中で、診断や教育に加え、研究活動を行っていくためには、最適な育成プログラムの作成、適切な人員配置と業務内容の見直しなど、さまざま

な問題が浮かび上がってくる。医師のみの力ではこれを成し遂げることは不可能と考えられ、臨床検査技師をはじめとする職員の協力体制が不可欠であり、このことは喫緊の課題と考えている。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) 梅澤 敬, 落合和彦, 山田恭輔, 落合和徳, 岡本愛光, 磯西成治, 九十九葉子, 沢辺元司, 池上雅博. BD SurePath 法の余剰検体を用いたハイリスク HPV 検出率と遺伝型の検討. 日臨細胞会誌 2017; 56(6): 276-82.
- 2) 梅澤 敬, 落合和彦, 山田恭輔, 落合和徳, 岡本愛光, 磯西成治, 沢辺元司, 池上雅博. 子宮頸部擦過細胞診における従来法と BD シュアパス™ 法の HSIL 以上の陽性率と標本適否の比較. 日臨細胞会誌 2017; 56(5): 225-31.
- 3) 林 勇介, 池上雅博. 組織検体における好酸球染色の検討 新しい染色法の試み. Med Technol 2017; 45(5): 523-9.
- 4) 梅澤 敬, 梅森宮加, 堀口絢奈, 石橋智美, 土屋幸子, 春間節子, 清川貴子, 鷹橋浩幸, 沢辺元司, 池上雅博. 膀胱癌超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診の液状処理細胞診とセルブロックによる診断精度 Direct-to-vial study. 診断病理 2017; 34(2): 84-91.
- 5) Haino T, Tarumi W, Kawamura K, Harada T, Sugimoto K, Okamoto A, Ikegami M, Suzuki N. Determination of follicular localization in human ovarian cortex for vitrification. J Adolesc Young Adult Oncol 2018; 7(1): 46-53.
- 6) Kato M, Goda K, Shimizu Y, Dobashi A, Takahashi M, Ikegami M, Shimoda T, Kato M, Sharma P. Image assessment of Barrett's esophagus using the simplified narrow band imaging classification. J Gastroenterol 2017; 52(4): 466-75.
- 7) Shirai Y, Enomoto Y, Harada T, Asai K, Ashizuka S, Ikegami M, Takahashi K, Shimizu N, Sekine T. Solid pseudopapillary neoplasm expresses inhibin- $\alpha$  and Tcf-3. Pathol Int 2017; 67(4): 228-9.
- 8) Mitsuishi T, Hamatani S, Hirooka S, Fukasawa N, Aizawa D, Hara Y, Dobashi A, Goda K, Fukuda T, Saruta M, Urashima M, Ikegami M. Clinicopathological characteristics of duodenal epithelial neoplasms: focus on tumors with a gastric mucin phenotype (pyloric gland-type tumors). PLoS One 2017; 12(4): e0174985.
- 9) Ichimasa K<sup>1)</sup>, Kudo SE<sup>1)</sup>, Mori Y<sup>1)</sup>, Misawa M<sup>1)</sup>, Matsudaira S<sup>1)</sup>, Kouyama Y<sup>1)</sup>, Baba T<sup>1)</sup>, Hidaka E<sup>1)</sup>, Wakamura K<sup>1)</sup>, Hayashi T<sup>1)</sup>, Kudo T<sup>1)</sup>, Ishigaki T<sup>1)</sup>, Yagawa Y<sup>1)</sup>, Nakamura H<sup>1)</sup>, Takeda K<sup>1)</sup>, Haji A (King's College Hosp), Hamatani S, Mori K (Nagoya Univ), Ishida F<sup>1)</sup>, Miyachi H<sup>1)2)</sup> (<sup>1</sup> Showa Univ, <sup>2</sup> Miyachi Clin). Correction: artificial intelligence may help in predicting the need for additional surgery after endoscopic resection of T1 colorectal cancer. Endoscopy 2018; 50(3): C2.
- 10) Sako T<sup>1)2)</sup> (<sup>2</sup> Kobe Univ), Kudo SE<sup>1)</sup>, Miyachi H<sup>1)3)</sup> (<sup>3</sup> Miyachi Clin), Wakamura K<sup>1)</sup>, Igarashi K<sup>1)</sup>, Misawa M<sup>1)</sup>, Mori Y<sup>1)</sup>, Kudo T<sup>1)</sup>, Hayashi T<sup>1)</sup>, Katagiri A<sup>1)</sup>, Ishida F<sup>1)</sup>, Azuma T<sup>1)</sup>, Inoue H<sup>1)</sup> (<sup>1</sup> Showa Univ), Hamatani S. A novel ability of endocytoscopy to diagnose histological grade of differentiation in T1 colorectal carcinomas. Endoscopy 2018; 50(1): 69-74.
- 11) Sugihara Y<sup>1)2)</sup>, Kudo SE<sup>1)</sup>, Miyachi H<sup>1)</sup>, Wakamura K<sup>1)</sup>, Mori Y<sup>1)</sup>, Misawa M<sup>1)</sup>, Hisayuki T<sup>1)</sup>, Kudo T<sup>1)</sup>, Hayashi T<sup>1)</sup> (<sup>1</sup> Showa Univ), Hamatani S, Okoshi S (Nippon Dent Univ), Okada H<sup>2)</sup> (<sup>2</sup> Okayama Univ). In vivo detection of desmoplastic reaction using endocytoscopy: a new diagnostic marker of submucosal or more extensive invasion in colorectal carcinoma. Mol Clin Oncol 2018; 6(3): 291-5.
- 12) 梅森宮加, 梅澤 敬, 堀口絢奈, 土屋幸子, 春間節子, 副島友里恵, 沢辺元司, 鷹橋浩幸. 自然尿における集細胞法の改良と BD サイトリッチ™ 法による診断精度. 日臨細胞会誌 2017; 56(6): 271-5.
- 13) 佐藤 峻, 鷹橋浩幸, 萬 昂士, 柳澤孝文, 三木 淳, 木村高弘, 穎川 晋. 【尿路上皮腫瘍: 変わりつつある概念】膀胱腫瘍における pT1 亜分類の現状と展望. 病理と臨 2017; 35(9): 824-30.
- 14) 長谷川雄一, 鎌田裕子, 萬 昂士, 鷹橋浩幸, 木村高弘, 車 英俊, 田畑龍治, 下村達也, 山田裕紀, 佐々木裕, 穎川 晋. 上部尿路上皮癌におけるプラキンファミリー蛋白発現の検討. 日泌会誌 2017; 108(2): 87-95.
- 15) Kitai S, Kiyokawa T, Tanaka Y, Onoue K, Takahashi H, Saitou M, Okamoto A, Fukuda K. MRI findings for primary fallopian tube cancer: correlation with pathological findings. Jpn J Radiol 2018; 36(2): 134-41.
- 16) Okayama Y, Wakui S, Wempe MF, Sugiyama M, Motohashi M, Mutou T, Takahashi H, Kume E, Ikegami M. In Utero exposure to Di (n-butyl) phthalate induces morphological and biochemical changes in rats postpuberty. Toxicol Pathol 2017; 45(4): 526-35.
- 17) Honda M, Yogosawa S, Kamada M, Kamata Y,



- Kimura T, Koike K, Harada T, Takahashi H, Egawa S, Yoshida K. A Novel near-infrared fluorescent protein, iRFP720, facilitates transcriptional profiling of prostate cancer bone metastasis in mice. *Anticancer Res* 2017; 37(6) : 3009-13.
- 18) Stolnicu S, Barsan I, Hoang L, Patel P, Terinte C, Pesci A, Aviel-Ronen S, Kiyokawa T, Alvarado-Cabrero I, Pike M.C, Oleva E, Park K.J, Soslow R.A. International endocervical adenocarcinoma criteria and classification (IECC) : a new pathogenetic classification for invasive adenocarcinomas of the endocervix. *Am J Surg Pathol* 2018; 42(2) : 214-26.
- 19) Nishikimi K, Nakagawa K, Tate S, Matsuoka A, Iwamoto M, Kiyokawa T, Shozu M. Uncommon human telomerase reverse transcriptase promoter mutations are associated with poor survival in ovarian clear cell carcinoma. *Am J Clin Pathol* 2018; 149(4) : 352-61.
- 20) Kojima A, Shimada M, Mikami Y, Nagao S, Takeshima N, Sugiyama T, Teramoto N, Kiyokawa T, Kigawa J, Nishimura R; Sankai Gynecology Study Group. Chemoresistance of gastric-type mucinous carcinoma of the uterine cervix : a study of the Sankai Gynecology Study Group. *Int Gynecol Cancer* 2018; 28(1) : 99-106.
- 21) Kawabata A, Yanaihara N, Nagata C, Saito M, Noguchi D, Takenaka M, Iida Y, Takano H, Yamada K, Iwamoto M, Kiyokawa T, Okamoto A. Prognostic impact of interleukin-6 expression in stage I ovarian clear cell carcinoma. *Gynecol Oncol* 2017; 146(3) : 609-14.
- 22) Jang JYA, Yanaihara N, Pujade-Lauraine E, Mikami Y, Oda K, Bookman M, Ledermann J, Shimada M, Kiyokawa T, Kim BG, Matsumura N, Kaku T, Kuroda T, Nagayoshi Y, Kawabata A, Iida Y, Kim JW, Quinn M, Okamoto A. Update on rare epithelial ovarian cancers : based on the Rare Ovarian Tumors Young Investigator Conference. *J Gynecol Oncol* 2017; 28(4) : e54.
- 23) Nagasaki Y, Suzuki M, Takahara J. All-dielectric dual-color pixel with subwavelength resolution. *Nano Lett* 2017; 17(12) : 7500-6.
- II. 総 説**
- 1) 鷹橋浩幸, 佐藤 峻, 萬 昂士. 【前立腺癌の画像診断】前立腺癌の新グレードグループ分類 (ISUP2014) の提唱とその後の動向. *日独医報* 2018; 62(1) : 13-21.
- 2) 清川貴子, 岩本雅美. 【胚細胞腫瘍】卵巣胚細胞腫瘍の組織分類と臨床病理学的特徴. *病理と臨* 2017; 35(12) : 1101-6.
- 3) 清川貴子. 女性の腹膜悪性中皮腫. *病理と臨* 2017; 35(10) : 964-6.
- III. 学会発表**
- 1) 梅澤 敬, 原田 徹, 落合和彦, 清川貴子, 鷹橋浩幸, 山田恭輔, 落合和徳, 岡本愛光, 春間節子, 沢辺元司, 池上雅博. (ワークショップ15: これからの子宮頸がん検診を考察するー液状化検体細胞診ー) 液状化検体細胞診による子宮頸部擦過細胞診の品質管理とベストプラクティス. 第56回日本臨床細胞学会秋季大会. 福岡, 11月.
- 2) 堀口絢奈, 梅澤 敬, 土屋幸子, 齊藤 歩, 副島友莉恵, 沢辺元司, 廣岡信一, 清川貴子, 池上雅博, 鷹橋浩幸. ERCP下擦過細胞診におけるBDサイトリッチ™法の診断精度と標本適否の検討. 第58回日本臨床細胞学会春季大会. 大阪, 5月.
- 3) 岩本雅美, 深澤 寧, 池上雅博, 清川貴子. 漿液粘液性境界悪性腫瘍 (SMBT) を拝啓とする卵巣悪性腫瘍の病理像の検討. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 4) 三石雄大, 濱谷茂治, 廣岡信一, 深澤 寧, 会澤大介, 鷹橋浩幸, 池上雅博. 潰瘍性大腸炎における内視鏡所見と組織学的所見の対比. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 5) 鹿 智恵, 深澤 寧, 三石雄大, 三宅美佐代, 須藤明美, 大和田麻美子, 鷹橋浩幸, 池上雅博, 羽野 寛. 肺がんにおける3番染色体短腕領域にあるヘテロ接合型マイクロサテライトマーカーの選出. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 6) 深澤 寧, 三石雄大, 鷹橋浩幸, 土井紀輝, 池上雅博, 清川貴子. 子宮内膜 alpha-fetoprotein (AFP) 産生腺癌の一例. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 7) 千葉 諭, 保坂倫子, 中村麻子, 片木宏昭, 萬 昂士, 鹿 智恵, 原田 徹, 遠藤泰彦, 鈴木正章, 池上雅博. 解剖例による正常肝光顕的組織研究 (第四報) : 単位面積あたりの門脈域数と中心静脈数. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 8) 中村麻子, 保坂倫子, 萬 昂士, 鹿 智恵, 原田 徹, 鷹橋浩幸, 千葉 諭, 池上雅博. 大腸神経内分泌腫瘍の病理学的検討 特に特殊染色を用いた脈管侵襲について. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 9) 片木宏昭, 深澤 寧, 福田隆浩, 鷹橋浩幸, 池上雅博. 下垂体癌の一例報告. 第106回日本病理学会総会. 東京, 4月.
- 10) 保坂倫子, 深澤 寧, 萬 昂士, 中村麻子, 鹿 智恵, 原田 徹, 千葉 諭, 鷹橋浩幸, 清川貴子, 池上雅博. 大腸に carcinoid と ganglioneuroma が合併し

た2例。第106回日本病理学会総会。東京，4月。

- 11) 佐藤 峻，萬 昂士，木村高弘，池上雅博，鷹橋浩幸。前立腺癌の発生領域における Intraductal Carcinoma of the Prostate の出現率の検討。第106回日本病理学会総会。東京，4月。
- 12) 三宅美佐代，黒田直人，牧島 玲，佐藤 峻，萬 昂士，池上雅博，鷹橋浩幸。6；11転座型腎細胞癌類似の組織像を呈する Xp11 転座型腎細胞癌の1例。第106回日本病理学会総会。東京，4月。
- 13) 萬 昂士，佐藤 峻，三木 淳，柳澤孝文，鈴木正章，鷹橋浩幸，池上雅博。経尿道的膀胱腫瘍一塊切除術（TURBO）による非筋層浸潤性膀胱癌の検討。第106回日本病理学会総会。東京，4月。
- 14) 濱谷茂治。（シンポジウム13：消化管 クロウン病の炎症評価と治療選択）クロウン病の病理診断。第37回日本画像医学会。東京，2月。
- 15) 鷹橋浩幸。（シンポジウム15：泌尿器 ここが変わった前立腺癌の病理，診断，治療）前立腺癌の新しいグレードグループ分類と細菌の動向：New grading system for prostate cancer and beyond. 第37回日本画像医学会。東京，2月。
- 16) 伊藤聡史，清川貴子，鷹橋浩幸。（ワークショップ5：卵巣癌と細胞診（浸潤がんを中心に））腹水・腹腔洗浄細胞診における卵巣類内膜癌の細胞像とその鑑別。第56回日本臨床細胞学会秋季大会。福岡，11月。
- 17) 清川貴子。（特別講演）上皮性卵巣腫瘍の組織分類と診断の実際。第80回日本病理学会近畿支部学術集会。大阪，2月。
- 18) 清川貴子。（臓器別シンポジウム11：「それぞれの癌」：診断・治療の現状と展望－卵巣癌－）改訂された卵巣癌の組織分類とパラダイムシフト。第55回日本癌治療学会学術集会。横浜，10月。
- 19) Kiyokawa T. (Plenary Lecture 2) Krukenberg tumor: history, histology and differential diagnosis. Annual Scientific Meeting of Victor Babeş the 10th National Pathology Symposium. Bucharest, Nov.
- 20) 廣岡信一，加藤正之，松田浩二。（シンポジウム5：内視鏡分野の大規模臨床研究：手法と課題）病理と内視鏡データベースの連携 病理医の立場から。第93回日本消化器内視鏡学会総会。大阪，5月。

#### IV. 著 書

- 1) 清川貴子。各論 第8章：女性生殖器。青笹克之（大阪大），加藤光保（筑波大），菅野祐幸（信州大）編。解明病理学。第3版。東京：医歯薬出版，2017。p.487-514。

#### V. その他

- 1) 三石雄大，千葉 諭，島田淳一，鷹橋浩幸，池上雅

博。多形性を示す睪 solid-pseudopapillary neoplasm の1例。診断病理 2017；34(3)：219-24。

- 2) Arakawa Y, Tamura M, Aiba K, Morikawa K, Aizawa D, Ikegami M, Yuda M, Nishikawa K. Significant response to ramucirumab monotherapy in chemotherapy-resistant recurrent alpha-fetoprotein-producing gastric cancer: a case report. Oncol Lett 2017; 14(3) : 3039-42.
- 3) Yokomizo R, Yamada K, Iida Y, Kiyokawa T, Ueda K, Saito M, Yanaihara N, Nakamura M, Okamoto A. Dedifferentiated endometrial carcinoma: a report of three cases and review of the literature. Mol Clin Oncol 2017; 7(6) : 1008-12.
- 4) Takaishi S, Asaka D, Nakayama T, Iimura J, Matsuwaki Y, Hirooka S, Takahashi H, Kojima H, Otori N. Features of sinonasal hemangioma: a retrospective study of 31 cases. Auris Nasus Larynx 2017; 44(6) : 719-23.
- 5) Nakada T, Akiba T, Yabe M, Tanaka K, Nakano M, Suzuki M, Morikawa T. Clinicopathological features of thymoma with ring calcification: case reports. Ann Thorac Cardiovasc Surg 2017; 23(5) : 256-61.